虐待を受けた子どもとの関わり方

—施設職員の内的体験を手がかりに—

臨床心理学コース　大　場　千　明

Approaches to Abused Children
Using Subjective Experiences of Residential Treatment Center Workers

Chiaki OBA

This study examines how Residential Treatment Center Workers approach to abused children, and what subjective experiences they do approaching abused children. Narrative data was collected from 13 people working at Residential Treatment Center. A qualitative analysis was applied to the data, producing five major categories. The categories are: "The feeling of not owning the base of the relationship jointly," "The feeling of being in volved" "The adjusting," "The getting weaker," "The characteristic of approaching." These categories make the process "The getting accustomed" centering around "The feeling of not owning the base of the relationship jo intly." Approaching abused children, workers have little experience in owning the base of the relationship jointly with abused children. While he or she is hurt by that experience, they try to cope with having little owning the base of the relationship jointly by adjusting their approaches or their own subjective experiences.

目　　次

1　問題と目的
2　方法
　A　研究協力者
　B　データ収集
　C　データ分析
3　結果
　A　＜関係の基盤を共有できていない感じ＞
　B　＜馴染んでいくこと＞
4　考察
　A　＜馴染んでいくこと＞の必要性
　B　＜馴染んでいくこと＞による被虐待児側の変化
　C　被虐待児に対する心理臨床的援助への応用

1　問題と目的

近年，わが国においても児童虐待に対する社会的関心が高まってきており，平成12年には「児童虐待の防止等に関する法律」が制定された。厚生労働省の報告例によれば，虐待を理由に児童養護施設などの児童福祉施設(以下，施設と略す)に保護される子どもの数も，平成10年度の1,391件から平成12年度には2,527件と増加し，施設で生活する子どもの約半数が何らかの虐待を体験してきていることを示唆する調査もある(西澤ら，1996)[1]。このような状況の中，直接被虐待児のケアに当たる施設職員(以下，職員と略す)からは，被虐待児と関わる上でのさまざまな苦悩や混乱，問題点が提示されている。

これまでの研究では，被虐待児は虐待的な環境に適応してきた結果として，相手に不快な感情を引き起こさせるような言動をすることが多く，こうした言動が被虐待児との関わりを難しくさせていることが示されている(Rodeheffer et al., 1976[2]; Gil, 1991[3]；西澤，1994[4]；奥山，1997[5])。激しいかんしゃくという言動を挙げてみると，被虐待児は情緒コントロールが悪く，怒りの感情が生じたときにそれを物や人に対する攻撃という形で行動化しやすいという報告がある(西澤，1998[6]；奥山，1997)。西澤(1998)によれば，人や物に危害を加えることの多いこの行動は大人の怒りや攻撃性を招来する危険性が高いという。

しかし，被虐待児の激しいかんしゃくがすぐに大人

の怒りを引き出すわけではなく，その間にはかんしゃくを起こした子どもとそれに対する大人とのやりとりがあるはずである。このため，大人に強い陰性の逆転移感情を生じさせる要因がどのようにして引き出されるかを考える上では，被虐待児の激しいかんしゃくにだけ焦点を当てるのではなく，両者の関係の中でどのようなことが起こっているかを見ていく必要があると思われる。

南方(2000)[7]は“面接の場でのかかわり”に注目し，被虐待児への治療場面におけるセラピスト(以下，Thと略す)の内的体験に焦点を当てている。この研究は，Thの内的体験を虐待以外の背景を持つクライエントと比較することによって検討し，被虐待児群に対するThの怒りや悲しみ，無力感といった内的体験が虐待以外の背景を持つ子どもに比べて有意に高いことを指摘している。

筆者は以前，看護職として働いていたことがある。その間，入院してきた被虐待児と出会う機会が何度かあったが，確かに被虐待児と関わっているときに，その子に対する激しい怒りや悲しみなどを体験したことがあった。しかし，筆者は被虐待児と関わっていると，自分の中に虐待以外の背景を持つ子どもに対しては生じない，一種独特の，特有といっても良いような内的体験が生じることもあった。こうした体験は筆者独自のものではなく，被虐待児と関わっている児童福祉施設の職員たちからも同様の体験が聞かれる。このような自分自身の内的体験がどうして生じるのか，何であるかがわからないことがまずあり，わからないために適切に扱えないことが，被虐待児が他者と関わることを難しくさせている要因となっているのではないかと筆者は考えるようになった。

南方(2000)の研究では，被虐待児のプレイセラピーに関する事例研究や報告から抽出された記述・表現を主とする質問項目を用いてThの内的体験を検討している。しかし，筆者が考える一種独特の内的体験は，職員自身もどうして生じるのか，何であるかがわからないために言語化が難しく，これまでの質問紙を用いた方法では取り上げにくいのではないかと筆者は考えた。

そこで，本研究は，被虐待児との関わりに関する職員の生の語りをデータとし，職員にどのような内的体験が生じているのか，そして，そのような体験をしながら被虐待児とどのように関わっているのかを明らかにする。それにより，心理臨床家が被虐待児に対する心理臨床的援助を行なう上での示唆を得ることを本研究の目的とする。職員がどのような思いを抱えながら，被虐待児との生活をどのように維持しているかを検討することは，心理臨床家が被虐待児の心理臨床的援助にあたる上で有益な示唆を与えてくれるものと思われる。

2　方法

本研究では，ストラウスとコービン(1990)[8]が提唱するグラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下，GT法と略す)を用いた。GT法とは，データに基づいた分析から独自の概念を生成し，それらによって統合的に構成された理論を構築する方法のことで，質的研究法の1つである。GT法は，まだ特定の領域でしか知られていないような現象について，その背後にある何かを明らかにし，理解するために用いることが可能な方法である。具体的技法としては，研究対象となる人々の体験に基づいて，彼らが用いている概念の特性や概念間の関係についての仮説を生成し，ある現象を暫定的に明かにしていくというものである。

A　研究協力者

本研究の協力者は，情緒障害児短期治療施設A学園の職員(生活指導員，保育士，Th)であった。A学園では，Thも生活指導員(以下，指導員と略す)や保育士と同様に，被虐待児と日常生活を共にしている。被虐待児と日常生活を過ごしているA学園の職員は，心理治療の場面でしか被虐待児と接することのないThよりも，筆者が考える一種独特の内的体験を生じる機会が多く，そうした体験をしながらも被虐待児と関わっていくための多種多様な工夫をしているのではないかと筆者は考えた。また，協力者をThのみに限定しなかったのは，被虐待児との関わりの中で生じる内的体験の本質と，関わりの中で行なわれている工夫には，職種を越えた共通性があると考えたためである。

A学園を選んだ理由は，①筆者の知人が勤務しており，協力が得やすいこと，②閉鎖性が高いといわれる児童福祉施設にあって，外に対してオープンであること，③職員が互いに苦労を共有できるように，公式の情報共有だけでなく，職員間で行われる日常のオープンな話し合いを尊重していることという特徴を有しているからであり，被虐待児との関わりというテーマについて情報が得やすいと考えた。協力者の選択は，筆者の知人であるB職員を介して上司であるA職員に研究への同意を得，研究に参加してくれる職員を募る

という形で行なった。

協力者の情報を要約すると，職種は指導員(男性4名，女性2名)，保育士(女性2名)，Th(男性3名，女性2名)，経験は1年未満から12年であった。

B　データ収集

調査面接(以下，面接と略す)でいきなり被虐待児との関わりの中で生じる内的体験について語ってもらうのは参加者にとって難しく，負担も大きいと考え，面接に先立ち，4～5人の小グループで被虐待児との関わりの中で生じる内的体験に関して自由に意見交換をしてもらった。意見交換は4回に渡って実施し，参加者は合計13名であった。参加者の一覧を表1に記す。意見交換の内容はMDに録音し，それを逐語録に起こした。各回の意見交換で述べられた内的体験の例を表2に記す。意見交換では，13人中11人の参加者が「どう関わったらいいかわからない」「何を考えてるかわからない」などの「わからない」という体験を最低1回は語った。例として，第3回でのやりとりを挙げる。

(特定の被虐待児に対して)B『でも，何が出てく

表1　意見交換参加者一覧

意見交換	第1回	第2回	第3回	第4回
実施時間	54分	54分	50分	42分
参加者番号 (職種，性別，経験年数)	A. セラピスト 男性（12.5年） B. セラピスト 男性（半年未満） C. セラピスト 女性（3.5年） D. 生活指導員 男性（7.5年） E. 生活指導員 女性（7.5年）	E. 生活指導員 女性（7.5年） F. 生活指導員 女性（9年） G. 保育士 女性（8年） H. 保育士 女性（10.5年）	B. セラピスト 男性（半年未満） I. セラピスト 男性（8年） J. 生活指導員 男性（7.5年） K. 生活指導員 男性（4年） L. 生活指導員 男性（半年未満）	B. セラピスト 男性（半年未満） E. 生活指導員 女性（9年） I. セラピスト 男性（8年） M. セラピスト 女性（半年未満）

表2　意見交換で語られた内的体験の例

第1回	第2回	第3回	第4回
・薄っぺらい感じ ・なんか刺激があってそれでポッて言ってって感じ ・からっぽなの，上滑りなのね ・なんか寂しいなと思いながら ・話しかけられてもなんて答えていいかわからない ・薄っぺらいから怖い ・ぶつかった人にしゃべってる感じ ・イライラする ・素直に受け入れられない ・ぞくっとするような感じ ・空恐ろしい感じ ・感覚レベルで感じてるっていう感じ ・こき下ろす感じ ・貶める感じ ・馴れ馴れしい ・生意気 ・あまりにも唖然としたから腹が立った ・人と遊ぶ以下って感じ	・こっちはもう気が収まらない ・終わりにならないって感じ ・いたぶる感じ ・怖い ・演技っぽいような感じ ・しつこい ・癇に障る ・かわいい ・えぐられるような思い ・せつなくて ・どうにもならない思い ・何かをしてあげたい ・丸裸にされたような，もう素の自分になっちゃったっていう ・わなわなしてる自分も情けない ・そういう自分と向き合うのはちょっとせつない，つらい気持ちになっちゃう ・やられたなっていう感じ ・自分が悲しくなっちゃう	・何が出てくるかわからない ・得体の知れなさがね ・エグイ ・聞いてもわからない ・わけわからないところとかドロドロしたところ ・付き合う距離がよくわからない ・彼に対してどう手を打っていってあげたらいいのかなっていうのもわからない ・嫌な気持ちにさせられる ・頭にくる ・むかつく	・いつまで続くかわからない ・なんでイライラしてるのかわからない ・いやらしい感じ ・どういう風に言えばそれが伝わるのかって全然皆目見当もつかない ・どこまでわかってやってるのかわからない ・ピンとこない ・多分話通じないんだろうなっていう感じがすごいした ・なんだかわかんないけど嫌な感じ ・なんかよく話がわかんない ・思い切り叱ってもなんか手応えがない ・なんだろうこの虚しさはって ・嫌になっちゃうし逃げたくもなる ・違和感 ・ふわふわ ・何が起こってるのかわからない

るかわからないんですよ，彼は』 I『そうだよね』 L『そうなんですよね』 B『ちょっと緩んだときに出てくるものはね，怖くないですか，なんか』 I『得体の知れなさがね』

わからないからイライラするなど，わからなさと感情体験を直接結びつける発言はみられなかったが，両者の間に何らかの関係があるのではないかと筆者は考えた。そこで，インタビューでは，被虐待児との関わりで生じるわからなさに焦点を絞ることとした。

その後，意見交換に参加してくれた13名に1回約45分程度の面接を行なった。面接は，言語化が難しく，これまでの質問紙を用いた方法では取り上げにくかった職員の内的体験を明らかにするため，自由度の高い半構造化面接を採用した。場所はA学園で随時利用可能な部屋を借り，日時は協力者の都合にあわせて，2000年10月20日から11月9日までの間に行なった。

面接で利用した質問項目の例を表3に示す。質問項目はGT法によってデータの収集と分析を循環的に進行する過程で，最初のものから徐々に変化していった。これらの質問項目は職員全員に必ず尋ねるのではなく，面接の状況を見て必要と思われる項目を随時判断した。参考資料として，参加した意見交換の逐語録と意見交換で述べられた内的体験のリスト(表2)を用意し，適宜利用しながら，被虐待児との関わりの中でどのようなときにわからないと思うか，そのときどのような感情が生じるかなどについて自由に語ってもらった。面接の内容はMDに録音し，それを逐語録に起こしてデータとした。

C　データ分析

当初のデータ分析はGT法に沿って以下のように行なった。データを読み，コード名をつけて概念化し，同じ現象に属していると思われる概念を集めてカテゴリーを生成した。その中で全体の中核となるカテゴリーを特定し，そのカテゴリーを中心にしてカテゴリー間を関係づけ，すべてのカテゴリーを統合した。以下に，手続きの一例を挙げる。

『この子はね，ホントに場を埋めるっていうか，関係を埋めるかのように無機質な言葉を吐いたり。何か，無機質な感じがするんですよ』という語りは，この語り手の言葉から＜無機質な感じ＞とコード化された。このような手続きで，＜希薄な対人関係＞，＜イメージ形成の難しさ＞，＜伝わらない体験＞，＜熱意＞などのコードが得られた。これらのコードのうち，＜無機質な感じ＞，＜希薄な対人関係＞，＜イメージ形成の難しさ＞は，その子が何を伝えようとしているのかが伝わってこないためにどう対応してよいかわからないなど，被虐待児の意図や情緒を共有できていないと職員が感じるためにわからなさが生じることを表していると思われた。そこで，これらのコードを＜意図や情緒を共有できていない感じ＞とカテゴリー化した。また，＜伝わらない体験＞，＜熱意＞は，職員が一生懸命関わっているのに，その思いが被虐待児に伝わらないためにどう対応すれば伝わるのかわからないなど，被虐待児に自分の思いが共有されていないと職員が感じるためにわからなさが生じることを説明していると思われた。これらのコードはまとめて，＜意図や情緒

表3　質問項目リスト

A．最初の質問項目	B．追加した質問項目
・何がわからないのか ・他のエピソードでもわからなさを感じたか，普段からわからないのか ・職員の性別によって同じ子どもに対するわからなさには違いがあるのか ・子どもも職員の性別によって関わり方を変えているように思うか ・他の被虐待児でも同じようにわからないのか ・虐待以外の背景を持つ子どもでも同じようにわからないのか ・他の職員の話を聞いて，自分もそう思った（わからないと思った）ことがあるか ・わからないときにどのような感覚，感情がするのか ・その感覚，感情は他の被虐待児に対しても生じるのか ・その感覚，感情は虐待以外の背景を持つ子どもに対しても生じるのか ・子どもに対してネガティブな感覚，感情が生じたあとに，その感覚，感情をどのように扱うのか，その子に対してどのような対応を取るのか	・担当や職種など，立場によってわからなさは違うのか ・わからなかったけどわかるようになったなど，わからなさの強度や内容に関して，変化はあるのか ・子どもが施設に慣れるとわかってくるのか ・被虐待児のわからなさについて考え方が変わった場合，いつ頃から変わり始めたのか，変わるきっかけや理由は何か

が共有されていない感じ>とコード化した。<意図や情緒を共有できていない感じ>や<意図や情緒が共有されていない感じ>は，職員に人と人とが関わっていく過程で共有されていることが前提となるような関係の基盤を被虐待児と共有できていない感じを生じさせると考えられた。そこで，上述の2つのカテゴリーをまとめて<関係の基盤を共有できていない感じ>とカテゴリー化した。

このような手続きを経て，5つのカテゴリーを生成した。その後，中心となるカテゴリーを明らかにし，生成された5つのカテゴリー間を関連づけ，すべてのカテゴリーを統合して仮説を生成した。

3　結果

5つのカテゴリーとは，<関係の基盤を共有できていない感じ>，<巻き込まれる感じ>，<調整すること>，<薄まること>，<関わり方の特徴>である。各々のカテゴリーの具体的な概要が表4である。これらのカテゴリーを統合し，生成された仮説が<馴染んでいくこと>である(図1参照)。

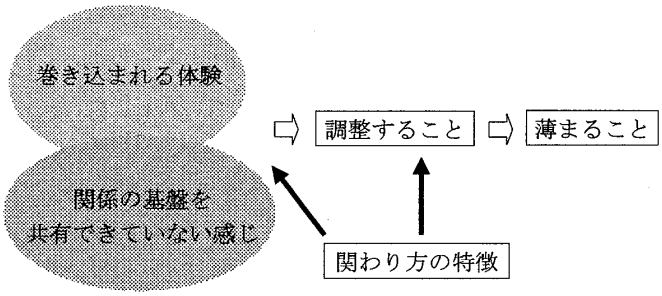

図1　馴染んでいくこと

本論文では，限られた紙数で簡潔に被虐待児との関わりの特異性を明らかにするため，5つのカテゴリーの中心である<関係の基盤を共有できていない感じ>と5つのカテゴリーを統合して生成された<馴染んでいくこと>を説明する。なお，『　』内の言葉は，面接における協力者の発言を引用したものである。また，面接内で語られた子どもの名前は，すべて○○に置き換えて記述することとする。

A　<関係の基盤を共有できていない感じ>

<関係の基盤を共有できていない感じ>という体験は，自分が相手の内的体験を共有できていないと感じる形で生じることもあれば，相手に自分の内的体験を

表4　カテゴリーおよびサブカテゴリーの一覧とカテゴリーに含まれる内容の例

カテゴリー	関係の基盤を共有できていない感じ	巻き込まれる感じ	調整すること	薄まること	関わり方の特徴
サブカテゴリーおよび内容例	**意図や情緒を共有できていない感じ** C.何を彼が表現してるのかとか、何を伝えたいのかというのは、そう、伝わってないんですよ.伝わってこないんです	**激情** H.カーッとなってしまって、もうこの世から消えてしまって欲しいっていうぐらい怒りが頂点に達する	**情動のコントロール** K.僕から関わろうっていうのは、気持ち的にはすごいあるんですけど、なんかしてあげたいなっていうのは。それをしちゃうとどうしてもお互いにいい時間じゃなくなっちゃうから、極力抑えてあまりやらないようにしてるんです、僕は	**手ごたえを得ること** B.全部が全部共有されてるわけじゃないけど、ここは接点で、接点じゃないところはきっとこういう風に動いてるんだろうなっていうぐらいの予想はついてきたってこと	**立場** G.なんとかしなきゃいけないとか、なんとかしたいとか、なんとか繋がりたいとか、関係取りたいという思いがやっぱり担当の子どもには強く出てしまうので
	意図や情緒を共有されていない感じ E.言ってもスコーンってかすったようにこちらが投げた玉をスッとよけて、玉がどっか行っちゃうような手ごたえのなさを感じる時が多々あるから.だからこそ、この子にはどういう風にとか、どういう返しをしてあげたらいいのかなとか、そういう風に思うときがよくありますね	**無力感** I.何やってたんだろうねっていうね,そういうこう,空虚感がどうしても残ってしまうので	**関わり方の工夫** B.わけわかんなくなっちゃうような場面で会わないようになってきたんじゃない、きっと。こっちが一人取り残されたりとか、なんか前にいてもいないような感じを受けたりとかっていうような場面では関わらないようになってきてるんだと思うんだよ	**引き受けること** D.大体こんな感じなんだろうってとこで収めちゃいますね.多少わかんないところがあっても別にいいので.おおよそわかっていれば.なんか自分の手の平に乗ってる感じであれば、特には不安にもならないし	**スタンス** A.援助者としての自分の支えをどこに持ってくるかってことで随分違うだろうね.（中略）もっと違う視点で自分の援助者としてを位置づけてれば、別に今君と会う必要はないよっていう感覚は持てるかもしれないよね
		恐怖感 G.彼女の甘えたい欲求が出てしまって,それに対して恐怖を感じるっていうのがあるんですよ			

共有されていないと感じる形で生じることもある。Thである Cは，ある被虐待児と一緒にいるときに生じる内的体験を『薄っぺらい感じ』と表現し，次のように語っている。

> 普通ならば，私にはこういう風に伝わったよっていう風に返すんですよ。だから，普通の会話でも一緒になって，あぁ良かったねっていうような相手が嬉しそうだからそういう風に言う，あぁ嬉しいって私にも伝わったよって。で，良かったねって返事を言うんですけど，そういう感覚でいるんですけど，この子はそれこそホントに本音の根っこのところで心の中で嬉しいという感情があるのか，それとも悲しいのか悔しいのかっていうのはなんだかわからないっていうか，それもないっていうか

ここでいう普通とは，Cにとっての普通であり，Cがそれまでの人生で体験してきた対人関係が基盤になっていると思われる。Cにとって普通の対人関係では，相手は自分に伝えたい何かを持っており，それに対して自分も何かを伝え返していくというやりとりがある。しかし，被虐待児との関わりでは，相手が自分に何を伝えたいのか，自分に何を求めて関わってくるのかが伝わってこないため，どう対応していいかわからなくなることがしばしば起こる。ここで，Cにとって問題となることは，被虐待児がどうしてそういう行動を取るのかがわからないことではなく，相手が自分に何を伝えたいのか，何を求めているのかという被虐待児の意図を共有できないことなのである。

実際に，被虐待児が職員に対して何かを伝えたいと思っているのか，何かを求めているのかをわかることはできない。しかし，被虐待児が何らかの言動を示すとき，彼らの中で何かしらの思いが生じていることは間違いないだろう。その思いの伝わらなさについて，セラピストBは次のように述べている。

> だからより未分化なんだと思うんだよ，そういう子の方がね。段々分化してきれいになってくと思うのね。なんか，はっきりしたものになってくと思うんだけど，それがまだ全然混沌としてるんだと思うんだよ。なんだかわかんないけど，ぐちゃぐちゃしてて，こっちが全然伝わってこないっていうようなものはあるけども（後略）

人生早期から長期間にわたる虐待を受けていた子どもの中には，年齢相応の情緒発達段階に達していないものが多いと思われる。更に，彼らの多くは，自分の情緒を表出する機会が少なく，表出パターンも豊かとは言えないであろう。一方，職員は，嬉しければ笑う，悲しければ泣くなど，情緒と言動との間に一定のパターンを想定していると思われる。そのパターンを被虐待児に当てはめようとするとき，職員は，被虐待児の情緒を共有できていない感じに困惑するのではないかと思われる。

指導員Lは，全くわからないと感じている被虐待児について語った後，その子どもに対するわからなさとは異なるわからなさを感じる子どもについて次のように語っている。

> ○○の場合は，僕との関係を○○が作りたいんですよね，一生懸命。で,「なんでこんなことするのかな」と思うけど，その，わからない行動っていうのも見たこともあるけども，彼女がやろうとしてることっていうかな，それはわかる気がするんですよね。ただ，そのやろうとしてること，目標を達成するのになぜそういう行為になっちゃうのかとか，僕はそこまでは理解しずらい部分もたくさんあるんですけど

この語りは，どうしてそういう行動を取るのかがわからないことと被虐待児の意図や情緒を共有できないことの違いを的確に表現していると思われる。職員が被虐待児の意図や情緒を共有できているときは，その子どもがどうしてそういう行動を取るのかということは理解できないまでも，その行動で何を伝えたいかということはおぼろげながらも職員に伝わっているのである。しかし，CやBの語りに見られたように，職員が被虐待児の意図や情緒を共有できないとき，職員の中に困惑が起こり，職員にはそれが表面的で薄っぺらいととられる。

一方で，被虐待児に自分の意図や情緒を共有されていないと職員が感じる場合もある。保育士であるGは次のように話している。

> こちらがあったかいような関わりをしたいなーということを相手は受け入れてくれないですし。でも，ついそういうことをしてあげたくなったりしてしまったりするんですけど，そういうのは聞いてくれないので。そういう辺りで付き合い方はホントにわからなかったですね。ずーっとそれは，この子に一体私は何をしてあげたらいいんだろうっていう，何ができるんだろうっていうのをずーっと，迷って迷ってわからなくてっていう感じでしたね，ホントに

一生懸命被虐待児に関わろうとするもののその熱意が被虐待児に受け入れられず,「どうしたら受け入れられ

るのかわからない」と途方にくれるという体験はしばしば聞く。福祉職や心理職に就く者は，専門教育の過程で，子ども，あるいはクライエントに対しては，共感的に関わることが大切であると学び，それまでの対人関係の中でも，自分が一生懸命関われば相手には通じるという体験をしてきている。このような体験は，自分の意図や情緒を相手に共有される体験であり，共感的な関わりの有効性や重要性を大部分支持するものであろう。しかし，被虐待児との関わりでは，共有されるだろうと思っている自分の意図や情緒が共有されていないと感じられることがしばしば起きる。職員はこの共有されていない感じに戸惑い，困惑することになるのである。

職員にとって共有されていて当然と思っていることが共有されていないと感じる体験は，人と関わっているという実感すら揺らがせてしまう程の強烈な体験である。Th であるAは被虐待児と一緒にいるときの感覚を『馴染まないんだよ，簡単に言うと。まさにエゴエイリアンなんだ』と表現している。引き続き語られたAの言葉を以下に引用する。

> 二人でいてそれなりにスムーズに同じ道行きをしてくっていう感覚がたいていの人にはあるじゃない，話をしてるときには。(中略)なんかこう肌合いとしてはしっくりしてる感じでことが進んでいくじゃない。そのね，しっくりさがないんだよ，まるっきり。で，それがわからないだった

ここでAが語っているのは，人と人とが共にいるときには共有されていることが前提となるような，関係の基盤とも言うべきものが共有されていないという感覚であると思われる。しかし，すべての被虐待児との関わりでこのような体験が生じるわけではない。また，自分の思いが共有されていない感じはするものの，意図や情緒は少し共有できている感じがするなど，＜関係の基盤を共有できていない感じ＞はさまざまなバリエーションを有している。

B ＜馴染んでいくこと＞

5つのカテゴリーは，それぞれ＜関係の基盤を共有できていない感じ＞が＜巻き込まれる感じ＞のベースにある内的体験，＜調整すること＞が＜関係の基盤を共有できていない感じ＞や＜巻き込まれる感じ＞への対処方略，その成果が＜薄まること＞，＜関わり方の特徴＞がすべてのカテゴリーに影響を与える条件と考えられた。このため，5つのカテゴリーを関連づけ，＜関係の基盤を共有できていない感じ＞を中心とする仮説，＜馴染んでいくこと＞として統合した。＜馴染んでいくこと＞は，職員が被虐待児とのかかわりの中で体験する＜巻き込まれる感じ＞とそのベースにある＜関係の基盤を共有できていない感じ＞に対処し，共有感を得られる体験が乏しい被虐待児との関わりに馴染んでいくプロセスと定義された。以下では，＜馴染んでいくこと＞について述べていく。

まず，被虐待児との関わりの中で，職員は＜関係の基盤を共有できていない感じ＞をしばしば体験する。共有されていて当然と思っていることが共有されていないと感じる体験は，職員にとって異質な体験であり，職員の情動は激しく揺さぶられる。また，関わりの中で被虐待児は職員にさまざまな情動をぶつけてくる。被虐待児の情動のぶつけ方は，指導員Fが，『今までの関係っていうのをあんまり思い出さずに，もうこの今ここにいるこの人だけを傷つけてしまえっていうようなそんな迫力で来ますよね』と語るように非常に激しいものである。このような被虐待児と関わることによって，職員の情動も激しく揺さぶられ，職員は怒りや嫌悪感，恐怖などを体験することになる。職員はそれまでの対人関係においてもこのような情緒反応を体験してきてはいるが，ここでの体験は，これまでにないほどの＜巻き込まれる感じ＞である。保育士であるGは，ある被虐待児との関わりで生じた感情について，『この子と一緒にいると，自分がどうなっちゃうんだろうっていうような，ぐらい怖くなっちゃったのね。(中略)彼女と向き合って正常じゃいられないっていうかね』と述べている。このような＜巻き込まれる感じ＞や被虐待児と＜関係の基盤を共有できていない感じ＞への対処方法として，職員は被虐待児との関わり方や自分の「何かをしてあげたい」という動機を低減するなどの＜調整すること＞を行なう。その結果，＜関係の基盤を共有できていない感じ＞や動機が＜薄まること＞という成果が得られ，＜関係の基盤を共有できていない感じ＞が＜薄まること＞によって，＜巻き込まれる感じ＞も＜薄まること＞が期待される。

職員が行なう調整は，被虐待児と関わりたいという自分の気持ちや被虐待児との関わり方に向けられる。職員は，被虐待児に対して生じる，自分の中の「何とかしてあげたい」「何とかしてあげなければならない」という気持ちをトーンダウンしようとする。また，被虐待児に対して生じる激しい怒りや無力感といった感情を低減しようとする場合もある。「何とかしてあげたい」といった気持ちを調整することによって，職員は，被虐待児に対して自分から積極的に関わるのを控

え，その子どもが関わりを求めてきた場面をとらえて関わるようになる。自分の中のネガティブな気持ちを低減した場合には，被虐待児に対して激しい怒りや無力感などが生じうるシチュエーションでは会わないようにするという関わり方の調整を行なう。

このような＜調整すること＞の結果として，職員は「何とかしてあげたい」「何とかしてあげなければいけない」という自分の一方向的な思いやネガティブな感情を薄め,「今この子に必要な関わりは何か」「今のこの子にとって心地よい人との距離はどのくらいか」を主にした関わりを始める。また，関わる場面や関わり方を＜調整すること＞で，それまではよくわからなかったその子どもの言動やその子どもの世界観を垣間見れるようになり，被虐待児との関わりで生じる，＜関係の基盤を共有できていない感じ＞が＜薄まること＞もある。

一方，＜調整すること＞がうまくいかず，被虐待児と関わりたいという意欲そのものが薄まってしまうこともある。また，職員が自分の中に生じた内的体験に圧倒され，＜調整すること＞にまでいたらない場合もある。こうした場合，職員は，被虐待児との関わりを避けるようになったり，被虐待児と関わる仕事そのものを辞めたくなったりするなど，被虐待児との関わり自体が＜薄まること＞もある。

いずれの場合にしろ，＜薄まること＞によって，被虐待児に対する職員の気持ちや関わり方はそれ以前のものとは様相が異なってくる。こうした点で，＜薄まること＞は，被虐待児との関わり方における新たな展開である。一方，被虐待児との関わりでは，一旦＜薄まること＞によって新たな関係が開けても，その関係が継続的に安定していかないことが多い。セラピストIは，被虐待児と安定した関係を維持することの難しさについて，次のように語っている。

> 関係ができてくると見えてくるものもあるんですが，関係ができてくることによって，子どもがすごく色んな感情をこちらにぶつけてくるっていうのもあるんですよね。(中略)すごくこう，攻撃的なところを向けてくるんですよ。そうすると，今まで得体の知れなさはあったりわからなさはあったにしても，表面的にやってきたのが，すごいそういう感情の渦にこちらも巻き込まれて頭にくるわけですよ

こうした点で，＜薄まること＞は，新たな＜関係の基盤を共有できていない感じ＞が生まれるきっかけともなり得る。

このような関わりは，その子どもの担当として関わるかどうかということや職員とその子どもの性差，職員のスタンスなど，＜関わり方の特徴＞によっても異なる様相を呈する。例えば，自分がその子どもの担当であったり，その子どもと同性で気軽に部屋に入ったり一緒に入浴したりする機会が多い立場だと，他の職員よりも＜関係の基盤を共有できていない感じ＞をあまり体験しない場合がある。一方で，担当であったり，接する機会が多い立場であるがゆえに，どうにか共有感を持ちたいという気持ちが強く働き，なかなか共有感を得られない被虐待児に対して，かえって激しい怒りなどの感情を抱いてしまうこともある。また，被虐待児に対して積極的に関わることが必ずしもいいとは限らないというスタンスを確立している職員は，そうでない職員よりも，被虐待児と関わる機会を減らすという調整をしやすい傾向がある。このように，＜関わり方の特徴＞は被虐待児と関わっていく過程で，さまざまな影響を及ぼしているのである。

この過程は，＜関係の基盤を共有できていない感じ＞や＜巻き込まれる感じ＞など，職員にとって異質な体験に＜馴染んでいくこと＞である。つまり，被虐待児との関わりとは，異質なものに馴染んでいく過程であると言える。＜馴染んでいくこと＞は，基本的には段階的に進んでいくが，その子どもと関わる限り何度でも繰り返されていく。この繰り返しは以前と全く同じではなく，被虐待児と共有できているものやその程度によって，さまざまな様相を呈するのである。

4　考察

本研究では，被虐待児と関わる職員が自分の中に生じるさまざまな内的体験に困惑しつつも，どのような工夫をしながら被虐待児と関わっていくかについて仮説生成を試みた。その結果，＜関係の基盤を共有できていない感じ＞，＜巻き込まれる感じ＞，＜調整すること＞，＜薄まること＞，＜関わり方の特徴＞という５つのカテゴリーを抽出し，＜馴染んでいくこと＞という仮説を生成した。以下では，被虐待児と関わっていく上で，なぜ＜馴染んでいくこと＞が必要であるか，職員が被虐待児との関わりで＜馴染んでいくこと＞によってどのような変化が生じるかについて考察する。更に，本研究で得られた結果を発展させ，被虐待児に対する心理治療への応用について検討していく。

A ＜馴染んでいくこと＞の必要性

被虐待児との関わりやその際に生じる内的体験について語るとき，多くの職員は「普通だったら…」と虐待以外の背景を持つ入所児童との関わりを例に出した。例えば，ある職員は，被虐待児の特徴として次のように述べた。

> 関係ができてくると普通はいいものをこちらに求めてくるじゃないですか。甘えたりとか自分が少しかわいがられたいとかっていう気持ちあるのが普通だと思うんだけど。あのお子さんたちはそれと平行してすごい怒りも出てくるんですよ

こうしたいわゆる“普通”との違いは，『エゴエイリアン』『宇宙人』などの言葉で表現されることもあった。このような“普通”との違いは，＜関係の基盤を共有できていない感じ＞としてまとめられた。

Stern(1985)[9]によれば，乳児は生後9ヶ月近くになると，他者(主に母親)と注意の的や意図，情動状態を共有したりしなかったりする体験を重ね，言語を獲得してからは，他者と意味を共有するようになるという。職員が日常の対人関係でこのような共有体験を重ねてきているとすれば，被虐待児との関わりでも，当然このような共有体験ができるだろうと期待していることが推測される。

しかし，被虐待児は，その子が何歳の時に，あるいは何歳の時からどのような虐待を受けて育ってきたかなどの虐待の属性によって体験の質や量に違いはあるだろうが，対人関係の発達に必要な共有体験が乏しい環境で育ってきたのではないかと思われる。このように共有体験を得られなかった被虐待児が，自分や他者の主観的体験を共有したいと思わなくなる，あるいは，そもそも共有できるということがわかっていないという可能性は想像に難くない。

しかし，被虐待児が他者との関係で共有体験をまったく求めていないということではないだろう。鯨岡(1998)[10]によれば，上述のSternの理論は，『人間の乳児に，気持ちの共有(情動共有や響き合い)を求める基本的欲求を仮定しているようにみえる』という。筆者は，この基本的欲求こそが，人と人とが関わる上で前提となる関係の基盤ではないかと考える。被虐待児との関わりで問題となるのは，共有体験が得られないことによって，職員が被虐待児に備わっている基本的欲求の存在を見失い，関係の基盤を共有することはできないと感じてしまうことではないだろうか。

そこで，被虐待児との関わりでは，職員が被虐待児に備わっている基本的欲求の存在を信じ，共有体験の乏しさや乏しさ故に生じる＜巻き込まれる感じ＞に傷つきながらも，その乏しさを改善していくことが必要と思われる。そのためには，職員が自分の考え方や関わり方をそのまま当てはめるのではなく，被虐待児が体験してきた想像もつかない世界を知的に理解していくことを通して，彼らの世界に馴染んでいかざるを得ないのであろう。

B ＜馴染んでいくこと＞による被虐待児側の変化

分析の過程では，職種にかかわらず，経験年数によって，カテゴリーの出方に差異が出る傾向が見られた。例えば，経験年数の多い職員では，＜巻き込まれる感じ＞が引き起こされるメカニズムとして＜関係の基盤を共有できていない感じ＞を何らかの形で想定していることが多いのに対して，経験年数の少ない職員では，両者が関連づけられることは少なかった。例として，以下にベテランセラピストであるIの言葉を引用する。

> 何かしてやりたいと思うし，できればいいとは思うけども，それが彼らの身にならないってことがやっぱりどうしてもあるもんですから。じゃあ，何かやってやったから彼らがそれに，月並みな言葉で言えば感謝して少しでも関係が安定してるかっていうと，絶対そうじゃないですから。だとしたら，やっぱりまずあまりね，こちらがそういうことに対して躍起にならないと。まぁ，淡々とね，付き合っていって，その中で何か手がかりを探していくって方が，場合によっちゃダメージが少ないですよね。あんまりこう，ごちゃごちゃした関係になってね，お互いに傷つけあうよりは。虐待児っていうのはもう，そういう傾向がどうしてもありますからね。傷つけあってしまうってのがね。あんまり傷つけても仕方ないですから

Iの語りからは，被虐待児との関わりでは，何かをしてやりたいと思って関わっても，普段の対人関係のようには関係が安定していかないという＜関係の基盤を共有できていない感じ＞を想定していることがうかがわれる。

職員が「何とかしてあげたい」と思って関わり，その子と心が通じ合えたように思えても，被虐待児との関わりでは，職員の期待に反して，そのような関係がなかなか積み重なっていかず，容易に引っくり返ることはしばしば起こると推測される。職員が被虐待児との関わりの中で難しいと感じるのは，被虐待児と＜関係の基盤を共有できていない感じ＞がするからというよりも，むしろ，関係の基盤を共有できたように思えて

も，それがいつまた引っくり返るかわからないという見通しの立たなさや安心感の得られなさのためであると思われる。一方，被虐待児にしてみれば，できないこと，あるいは，そうする必要があるとも思っていないことをしないといって，職員から責められているように感じるのではないだろうか。しかし，職員は期待をしていた分だけ傷つき，裏切られた気持ちになるという悪循環がここに生まれるようである。

そのような経験を重ねてきた職員は，常識的な対人関係の過程で進むような関係の深まりを被虐待児に求めていくことが，必ずしも彼らに対する援助に結びつかないと考え，自分の気持ちを薄めていくことを肯定的に捉え，活用しているように思われる。前述のIの語りからは，期待が薄ければ，なかなか常識的な対人関係のように関係が安定していかないことについて，怒りや無力感といったネガティブな感情をコントロールしやすくなると想像される。一方，被虐待児の側も，オーバーキャパな課題を求められることが減少し，わずかながらも安定して関われる場面や瞬間での体験を，対人関係のイメージとして少しずつ積み重ねていけるようになるのではないかと推測される。

被虐待児の特徴として取り上げられる問題行動の多くは，被虐待児が虐待環境に適応するために必死で身につけてきた対処法略であることが多い。職員が自分とは異質な被虐待児の世界に＜馴染んでいくこと＞は，そのような被虐待児なりの工夫を否定したり，脅かしたりする方向とは反対の関わりである。自分の世界を脅かすことなく，それでも自分を見守ってくれる大人がいることによって，被虐待児は安心して育っていくことができるのではないかと思われる。また，職員が被虐待児の世界に馴染んでいくということは，被虐待児が職員を通して常識的な世界に触れ，少しずつ常識的な世界に馴染んでいくということにもつながるのではないかと推測される。職員と被虐待児がともに相手の世界に馴染んでいくということは，互いに共有できる世界が広がっていくことを期待させるように思われる。

C　被虐待児に対する心理臨床的援助への応用

心理臨床家の多くは，被虐待児に対する援助の経験が浅く，殊に，児童福祉の現場で被虐待児への心理臨床的援助にあたっているのは，院生など，心理臨床的援助そのものの経験が浅い者が多いと聞く。一方，職員は，心理臨床家よりもはるかに前から，生活の場面で被虐待児に対する援助を行なってきている。そうした職員から彼らが行なっている工夫を学ぶことは，心理臨床家が被虐待児への心理臨床的援助を行なう上で有益であると筆者は考え，本研究を行なった。

筆者は，被虐待児への心理臨床的援助では，子どもにとってはもっとも触れられたくない被虐待体験という部分に触れずにはいられなくなる時が必ずくると考えている。そのとき，被虐待児はどのような思いでその治療に同意してくれるのだろう。「痛いし怖いが，この先生とならやってみよう」，あるいは，「痛いけどこの先生ならもう少し頑張ってみよう」という思いが治療を支えるのではないだろうか。しかし，被虐待児との関わりでは，そうした関係を積み重ねていくことが非常に難しいとも感じている。心理臨床家が，被虐待児の世界に＜馴染んでいくこと＞という視点を得ることは，被虐待児と安定した関係を保つために必要となる莫大な困難さを低減させるのに役立つのではないかと思われる。

（指導教官：田中千穂子教授）

注

本稿は，2001年1月に提出した修士論文を加筆，修正したものである。

引用文献

1）西澤哲・原田和幸・高橋利一　1996　養護施設における子どもの入所以前の経験と施設での生活状況に関する調査　東京の養護　東京都社会福祉協議会　88-103

2）Rodeheffer, M. and Martin, H. P.　1976　Special problems in developmental assessment of abused child. In H. P. Martin (Ed.), *The abused child: A multidisciplinary approach to developmental issues and treatment*, Ballinger Publishing Company

3）Gil, E.　1991　*"The healing power of play: Working with abused children"*　The Guilford Press, (西澤哲訳『虐待を受けた子どものプレイセラピー』誠信書房，1989)

4）西澤哲『子どもの虐待：子どもと家族への治療的アプローチ』誠信書房，1994

5）奥山眞紀子　1997　被虐待児の治療とケアー　臨床精神医学　26(1)　19-26

6）西澤哲　1998　虐待を受けた子どものケア　児童養護施設が直面する課題　児童養護　29(2)　34-39

7）南方真理子　2000　身体的虐待を受けた子どものプレイセラピーにおけるセラピストの体験に関する研究(1)　日本心理臨床学会第十九回研究発表集　230

8）Strauss, A. and Corbin, J. "Basics of qualitative research: Grounded theory procedures and techniques" Sage Publications, Inc, 1990(南裕子監訳『質的研究の基礎 グラウンデッド・セオ

リーの技法と手順』医学書院，1999
9）Stern, D. N. "The Interpersonal World of the Infant" New York: Basic Books, 1985（小此木啓吾ほか　訳『乳児の対人世界』岩崎学術出版，1989）
10）鯨岡峻『両義性の発達心理学』ミネルヴァ書房，1998